

アーツカウンシル東京 アーツアカデミー事業

「芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座」

5年間の実績について

(平成30年度～令和4年度)



概要

- 本資料の主旨・目的 2
- 「キャパシティビルディング講座」とは 3
- 「『芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座』過去5か年にかかる成果検証調査」について 4
- 調査の全体像 ～講座終了から成果の発現までの流れ～ 6
- 調査結果のまとめ 7

5年間の実績（調査結果及び効果検証）

1. 修了生の現在の活動形態や表現分野 9
2. 修了生の受講理由 10
3. 受講時のアンケート：平成30年度～令和4年度 講座満足度 11
4. 修了生の知識・技術の習熟度合 12
5. 修了生の知識・技術の習熟度合の具体例 13
6. 受講をきっかけとした行動の有無、実行した行動 14
7. 実行した行動～多様な学びによる価値観の変容の影響 15
8. 受講をきっかけとした行動の具体例 16
9. 修了生の受講時からの変化 17
10. 受講後の行動をふまえた成果 18
11. 受講後の行動をふまえた具体的な成果の事例 19
12. 行動の変化から具体的な成果までの事例 20

参考資料 修了生のヒアリング

■本資料の主旨・目的

平成30年度からアーツカウンシル東京で実施している芸術文化領域の担い手を対象とした人材育成事業「芸術文化創造活動の担い手のためのキャパシティビルディング講座」（以下、「キャパシティビルディング講座」）の修了生は、芸術文化における多様な分野・領域を支える担い手として、東京をはじめ全国で活躍している。

本講座が修了生にどのように影響し、活用されたか、その成果等を検証するため、事業実施から5年の節目である令和5年度に、修了生を対象に調査した。

本講座の歩みを紹介し、芸術文化領域における専門人材の育成やキャリア形成支援策の参考に広く資することを目的として、その調査結果を公開する。

■「キャパシティビルディング講座」とは

平成30年度からアーツカウンシル東京で実施している芸術文化領域の担い手を対象とした人材育成事業。公募選考による受講生が取り組む課題の解決や新たな価値創造、目標達成に必要な思考力やスキルを多面的に磨く連続講座と課題解決／価値創造戦略レポートの作成・発表により構成している。ファシリテーター／アドバイザーによる各講座のフォローアップ等による伴走支援を特徴とする。

芸術文化と社会の関係性を広い視座でとらえ、レクチャー、ワークショップ、ディスカッション、面談などを通じて、講師、ファシリテーター／アドバイザー、受講生が対話し、分野横断的なネットワークを構築しながら、受講生自らの事業や企画の実現に向けた学び合いの場を創出している。

受講対象者

3年以上の活動経験のある芸術文化従事者（セルフマネジメントのアーティスト・表現者、制作者、プロデューサー、キュレーター、コーディネーター、アートマネージャー、芸術団体・アートNPOの職員、芸術文化支援団体のプログラムオフィサー、行政・企業等の文化担当者、研究者等）。

分野・年齢不問であり、芸術文化に関わる幅広い人材が対象。

定員 各年度概ね16名程度

受講料 無料

■ 調査方法

キャパシティビルディング講座 受講時のアンケート分析、修了生のフォローアップ・アンケートの実施と分析、ヒアリングの実施。

受講時のアンケート

実施期間	平成30年度～令和4年度の各講座終了時
対象者数	平成30年度～令和4年度 受講生 計81名
方法・回収数	紙面アンケート(平成30、31年度)、オンラインアンケート(令和2～4年度)：81件（回答率100%）
質問内容	講座満足度／講座は期待通りだったか／課題解決の手ごかりはあったのか／講座の形式に対する評価／推薦意向（※本資料では、満足度の分析結果を利用）

フォローアップ・アンケート

実施期間	令和5年12月23日～令和6年1月23日
対象者数	平成30年度～令和4年度 修了生 80名
方法・回収数	オンラインアンケート / 66件（回答率82.5%）
質問内容	I.現在の活動 / II.受講後の知識・技術などの習得度合 / III.受講後の行動変容 / IV.受講後の行動を踏まえた成果 / V.講座そのものについて / VI.芸術文化支援について（※本資料ではI、II、III、IVの分析結果を利用）

ヒアリング

実施期間	令和6年1月～3月
対象者数	平成30年度～令和4年度 修了生 8名
方法	グループ、個別、書面によるヒアリング
ヒアリング内容	受講のきっかけ・問題意識／受講で得た学びと行動変容など／講座受講後の主な成果、等

調査・分析 慶應義塾大学SFC研究所

平成30年度～令和4年度 講座一覧

5年間で計39回の講座を開催。令和2年度と令和3年度はコロナ禍の影響によりオンラインで開催。

平成30年度 ファシリテーター／アドバイザー 伊藤美歩、若林朋子

- 第1回：VISION、MISSIONを磨く&課題・目標の設定（山元圭太）
- 第2回：活動基盤を磨く（山元圭太）
- 第3回：活動のためのファンドレイジング力を磨く（伊藤美歩、若林朋子）
- 第4回：活動の意義を伝える評価軸を磨く（落合千華）
- 第5回：芸術と社会の関わり方を磨く（大澤寅雄）
- 第6回：課題解決戦略レポートの最終発表会

平成31年度 ファシリテーター／アドバイザー 小川智紀、若林朋子

- 第1回：ヴィジョン、ミッションを磨く&課題・目標の設定（山元圭太）
- 第2回：活動基盤を磨く（山元圭太）
- 第3回：活動のためのファンドレイジング力を磨く（1）（伊藤美歩）
- 第4回：活動のためのファンドレイジング力を磨く（2）（若林朋子）
- 第5回：芸術文化の必要性を考える（片山正夫）
- 第6回：活動の意義を伝える評価軸を磨く（源由理子）
- 第7回：芸術と社会の関わり方を磨く（大澤寅雄、小川智紀）
- 第8回：課題解決戦略レポートの最終発表会

令和2年度 ファシリテーター／アドバイザー 小川智紀、若林朋子

- 第1回：つくりたいものをつくり続けるために 思考と実践（小川智紀、深田晃司）
- 第2回：ヴィジョン、ミッションを磨く（山元圭太）
- 第3回：活動の意義を伝える評価軸を磨く（源由理子）
- 第4回：これからの活動のためのファンドレイジング力を磨く（若林朋子）
- 第5回：社会と活動を持続するための発想力を磨く（近藤ヒデノリ）
- 第6回：社会における芸術文化の必要性を考える（片山正夫）
- 第7回：芸術文化と社会の関わり方を磨く（大澤寅雄）
- 第8回：課題解決戦略レポートの最終発表会

令和3年度 ファシリテーター／アドバイザー 小川智紀、若林朋子

- 第1回：私たちが生きる社会と芸術文化の置かれた環境を俯瞰する（小川智紀、若林朋子）
- 第2回：ヴィジョン、ミッションを磨く（山元圭太）
- 第3回：芸術文化と社会の関わり方を磨く（大澤寅雄）
- 第4回：これからの活動のためのファンドレイジング力を磨く（徳永洋子）
- 第5回：活動の価値を伝える力を磨く（上岡典彦）
- 第6回：思考の整理・課題の抽出・設定（小川智紀、若林朋子）
- 第7回：活動の意義を伝える評価軸を磨く（源由理子）
- 第8回：社会における芸術文化の必要性を考える（片山正夫）
- 第9回：課題解決戦略レポートの最終発表会

令和4年度 ファシリテーター／アドバイザー 小川智紀、若林朋子

- 第1・2回：ヴィジョン・ミッションを磨く&ファンドレイジング力を磨く（山元圭太）
- 第3回：活動の価値を引き出す評価軸を磨く（源由理子）
- 第4回：越境が生み出す創造的な連携・協働（坂倉杏介）
- 第5回：思考の整理・課題の抽出・設定（小川智紀、若林朋子）
- 第6回：「文化権」から捉え直す（中村美帆）
- 第7回：社会における芸術文化の必要性を考える（片山正夫）
- 第8回：課題解決/価値創造戦略レポートの最終発表会

※敬称略

■調査の全体像 ～講座終了から成果の発現までの流れ～

・「キャパシティビルディング講座」受講による影響を成果と捉え、成果に至るまでの流れを「意識」「知識・技術・態度・価値観」「行動」の変化に分けた上で講座の効果検証を実施した。

意識の変化

- ・ 各講座受講直後の意識の変化を調べる。受講直後に意識が変化していないと、次のステップである知識・技術・態度・価値観の変化につながらないと考えられる。
- ・ 受講時のアンケート結果を分析

知識・技術・態度・ 価値観の変化

- ・ 講座終了から数年後の知識・技術・態度・価値観がどのように変わったのかについて調べる。どのような知識・技術・態度・価値観が残っている、または忘れられているということ等を把握する。
- ・ 修了生のフォローアップ・アンケート及びヒアリング結果を分析

行動の変化

- ・ 講座終了後の行動変容を調べる。行動変容は成果の発現に必要なステップであると考えられるため、どのような行動をとったのかを把握する。
- ・ 修了生のフォローアップ・アンケート及びヒアリング結果を分析

成果の発現

- ・ 講座終了後の成果を調べる。成果については様々なものがあると考えられるため、様々な項目から成果を把握する。
- ・ 修了生のフォローアップ・アンケート及びヒアリング結果を分析

■調査結果のまとめ

・受講による学びを活用し、活動基盤の強化や、資金調達能力の向上、事業増加、新たな活動の展開、外的評価の向上等の多様な成果が発現している。

・講座では「多様な学びによる価値観の変容」が身についた人が多く、その価値観が身についた人は身につけていない人よりも行動変容及び成果の両方が発現している。

意識の変化

- ・ 5年間の講座満足度は94%。各年度とも戦略レポートの発表の満足度が特に高い傾向

知識・技術・態度・ 価値観の変化

- ・ 知識の定着率よりも、態度や価値観に関する変化を体得している修了生が多い。
- ・ 「多様な学びによる価値観の変容」が価値観として身についた修了生は65%であり、各種知識・技術・態度・価値観の中で最も残存率が高い。また、講座受講時よりも受講後の方が身につけている率が高く、講座を通じた継続的な対話や学び合いが寄与していると考えられる。

行動の変化

- ・ 講座受講後、91%の修了生が何らかの行動をとっている。
- ・ 最も多かった行動変容は「新たな事業展開の試行」であり、7割の受講生が行動を行っている。また、ヴィジョンやミッションの再考、助成金・補助金への応募等のアクションを行っている。
- ・ 「多様な学びによる価値観の変容」をした人は、そうではない人と比べて各種行動を起こしている傾向にある。

成果の発現

- ・ 88%の修了生が何らかの成果を出している。
- ・ 最も多かった成果は「仕事の数が増えた」や「助成金・補助金の採択」であり、講座を通じて行動変容が起こった成果が生まれている。
- ・ 自身の活動の外的評価の増加やネットワークの発展が生まれている。
- ・ 講座がきっかけで創造環境の向上に寄与する取組が生まれている。
- ・ 法人設立や雇用スタッフの増加などの活動基盤強化の成果も発現している。
- ・ 「多様な学びによる価値観の変容」をした人は、そうではない人と比べて、受講生やアドバイザー／ファシリテーター等との連携や仕事の増加、他者と学びを共有する傾向にあると考えられる。

■調査結果のまとめ 修了生のヒアリングから見えてきた成果

活動基盤の強化から受講生同士の協業、新規事業立ち上げ、活動の評価の向上まで、様々な成果が生まれている

自団体の雇用の増加や法人化からアートの仕事に特化したジョブフェア「ART JOB FAIR」のような業界初新規事業の立ち上げ、批評家からの評価・受賞の増加、メディア露出の増加、依頼仕事の増加、クラウドファンディングで資金調達を行い制作した映画の上映機会や評価の増加等、様々な成果が表れている。講座を通じて獲得した知見や価値観、意識の変化によって行動の必要性を認識し、受講が実際に実践のための初めの一歩を踏み出すきっかけになっている。

成果に至るまでの第一歩を講座によって踏み出せており、第一歩の行動変容が成果にとって重要である

講座を通じた受講生仲間との学び合いによって共に成長し、成長過程で行動を起こし、行動の結果として様々な成果が出ている。実際に修了生のヒアリング内容からすると、どのような行動なのかは個人によるが、行動変容があるから成果に結びついている。

自らの考えをアウトプットにしたものは重要。講座終了後の行動変容と成果につながっている

講座の中で作成した課題解決／価値創造戦略レポートが行動の礎となり、その実現をしたというケースがある。レポートが行動変容のための指針のような役割となっている。

また、講座応募時に受講動機や応募段階での自身の課題や目標、その実現のために考えうる糸口を書いてもらうことによって、受講者の考えが受講を通して深く清廉されたり柔軟に変化してゆき、レポート作成により自身の活動の価値や目標の実現のための戦略的思考をより言語化できるようになることにつながっている。

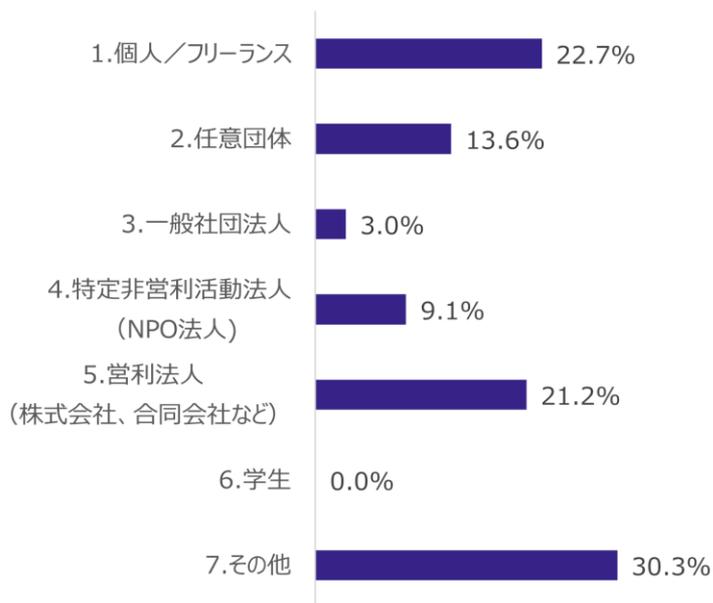
一歩を踏み出すきっかけは、講座で知り合った受講生仲間やファシリテーター/アドバイザーの存在が大きい

講座の内容そのものよりも、講義をきっかけとして受講生同士やファシリテーター/アドバイザーとの対話が行動変容につながっている場合が多い。

1. 修了生の現在の活動形態や表現分野

- ・ 個人／フリーランスから任意団体、営利法人、公益法人などさまざまな活動形態で、芸術文化活動を継続している。
- ・ 演劇・舞踊、公演・展示・映画・映像等に係る分野の修了生が多い。

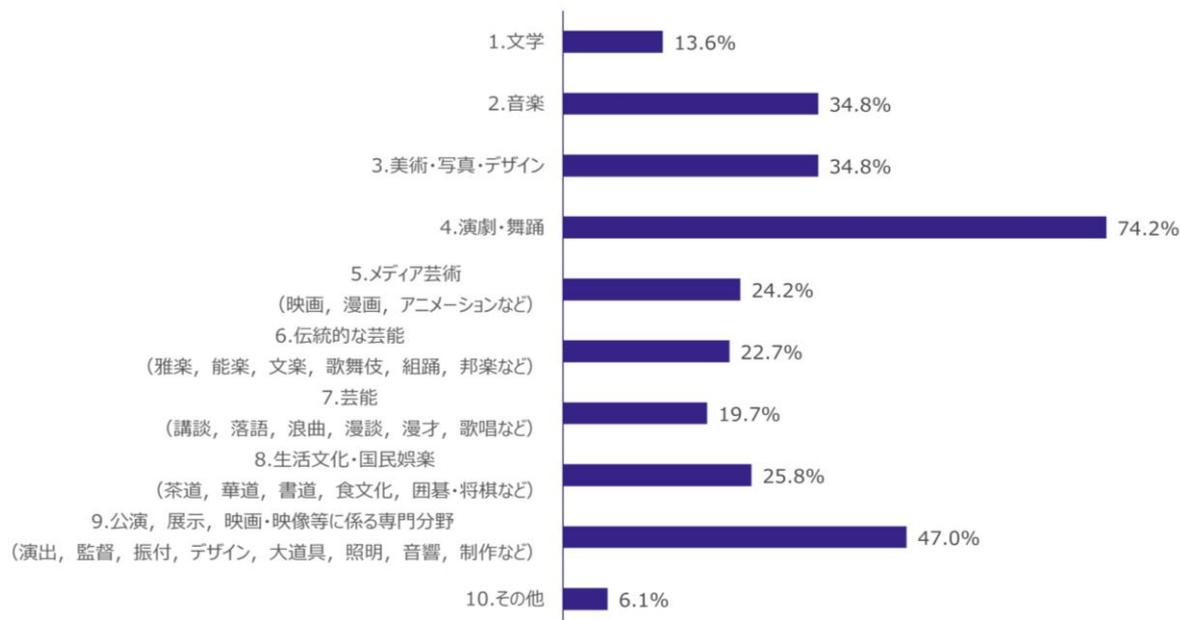
活動形態



(n = 66)

※その他は公益財団法人、独立行政法人、地方公共団体等

表現分野 〈複数回答〉

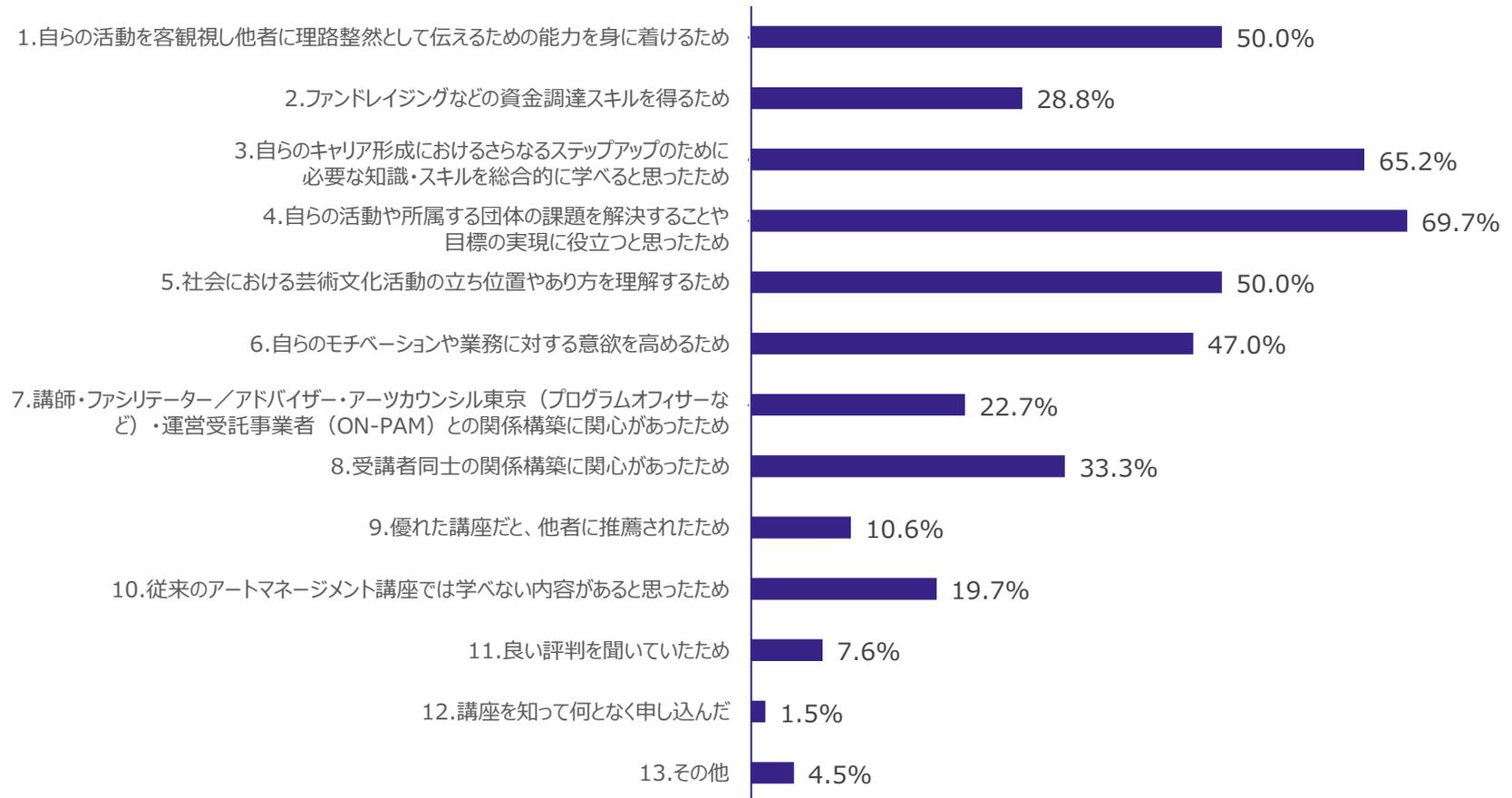


(n = 66)

※その他は福祉、IT関連等

2. 修了生の受講理由 〈複数回答〉

- ・自らの活動や所属する団体の課題解決や目標の実現及び自身のキャリア形成のさらなるステップアップを理由とした人が多い。



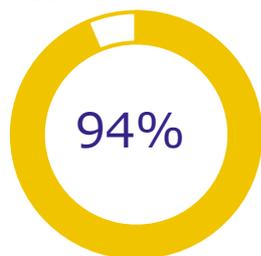
(n = 66)

※その他は「情報保障があるため」等

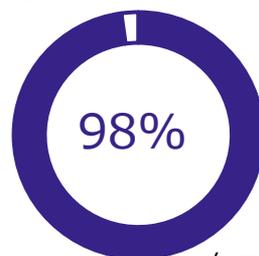
3. 受講時のアンケート：平成30年度～令和4年度 講座満足度

- ・5年間の講座満足度（「とてもよかった」と「よかった」の回答率）平均値は94%であった。
- ・満足度が相対的に低い令和2年度と令和3年度は、コロナ禍の影響でオンライン開催であった(令和2年度と令和3年度の講座満足度平均値は89%)。
- ・対面開催の平成30年度、平成31年度、令和4年度に限定すると、講座満足度の平均は97%であった。

平成30年度～令和4年度：
とてもよかった+よかった率

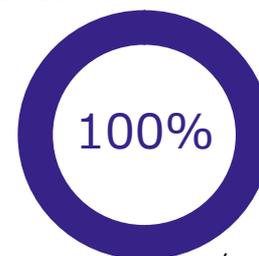


平成30年度：
とてもよかった+よかった率



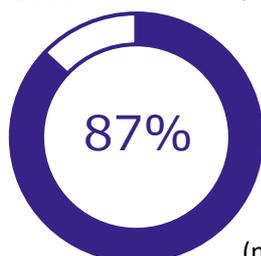
(n = 18)

平成31年度：
とてもよかった+よかった率



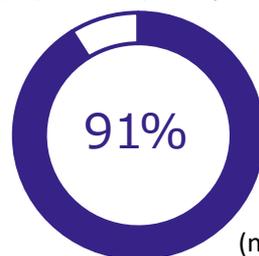
(n = 11)

令和2年度：
とてもよかった+よかった率



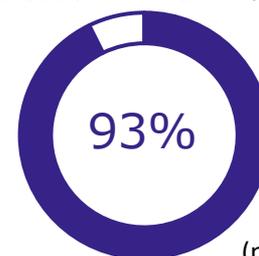
(n = 20)

令和3年度：
とてもよかった+よかった率



(n = 16)

令和4年度：
とてもよかった+よかった率

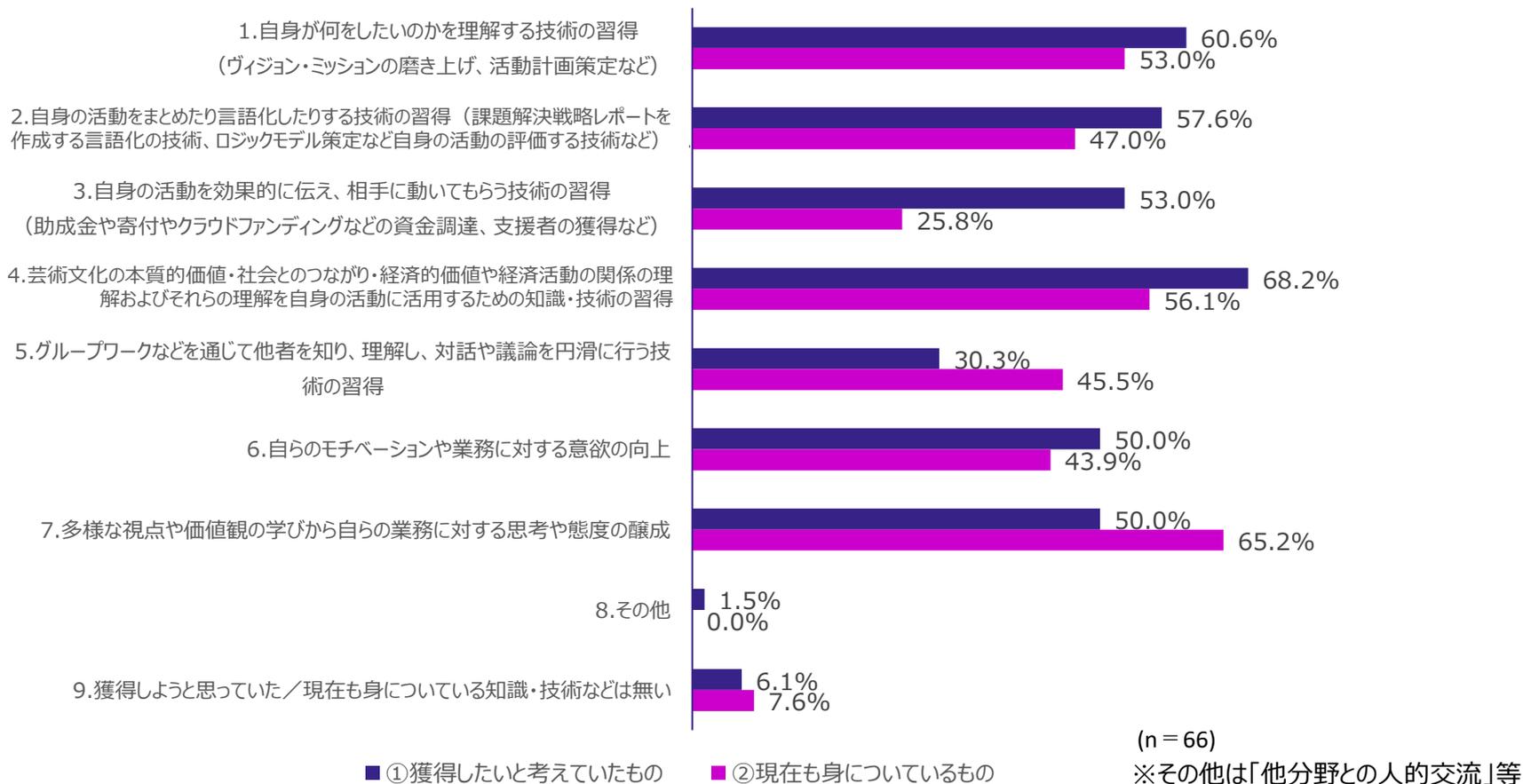


(n = 16)

※1.とてもよかった、2.よかった、3.ふつう、4.あまりよくなかった、5.よくなかったの5段階で評価
全体の平均値は、各年度の平均値を平均したもの。円グラフ内に記載しているパーセンテージは「とてもよかった」「よかった」の回答割合の合計値

4. 修了生の知識・技術の習熟度合（複数回答）

- ・当初獲得したいと考えていたものとして、「助成金等の資金調達」といった知識・技術に直結するものが多い。
- ・当初の期待より現在のほうが身につけているものは「多様な視点や価値観の学びからの思考・態度の醸成」「他者理解や対話力」であり、受講を通じた継続的な対話や学び合いが寄与していると推察される。



5. 修了生の知識・技術の習熟度合の具体例

- ・ヴィジョン・ミッションの磨き上げ、他者理解や対話力の向上、他者からの交流で得た多様な学びの活用などが、修了知識・技術等となっている。

ヴィジョン・ミッションの磨き上げ

- ・同僚らとチームで目標やビジョン・ミッションを話し合うことがスムーズにできるようになった。目標などを時にチームで再設定し、次の目標に進むということが組織として重要であると感じている。リーダーシップを取るより、チームで取り組むことがやりやすくなった。
- ・文化権の話を聞いてより自分の活動に意義を見出せた。

他者理解や対話力の向上

- ・ステークホルダーとの関わりや、ファンドレイジングについて学んだことで、どんなことでも実践していくには人と協力しなければ成しえないという現実について、肝に銘じるようになった。
- ・他者に伝わるように言語化しようとする態度と価値観。また、自身の価値観や目標を他者と協力して達成に向かえる形へと変換しようとする意識。

他者からの交流で得た学びの活用

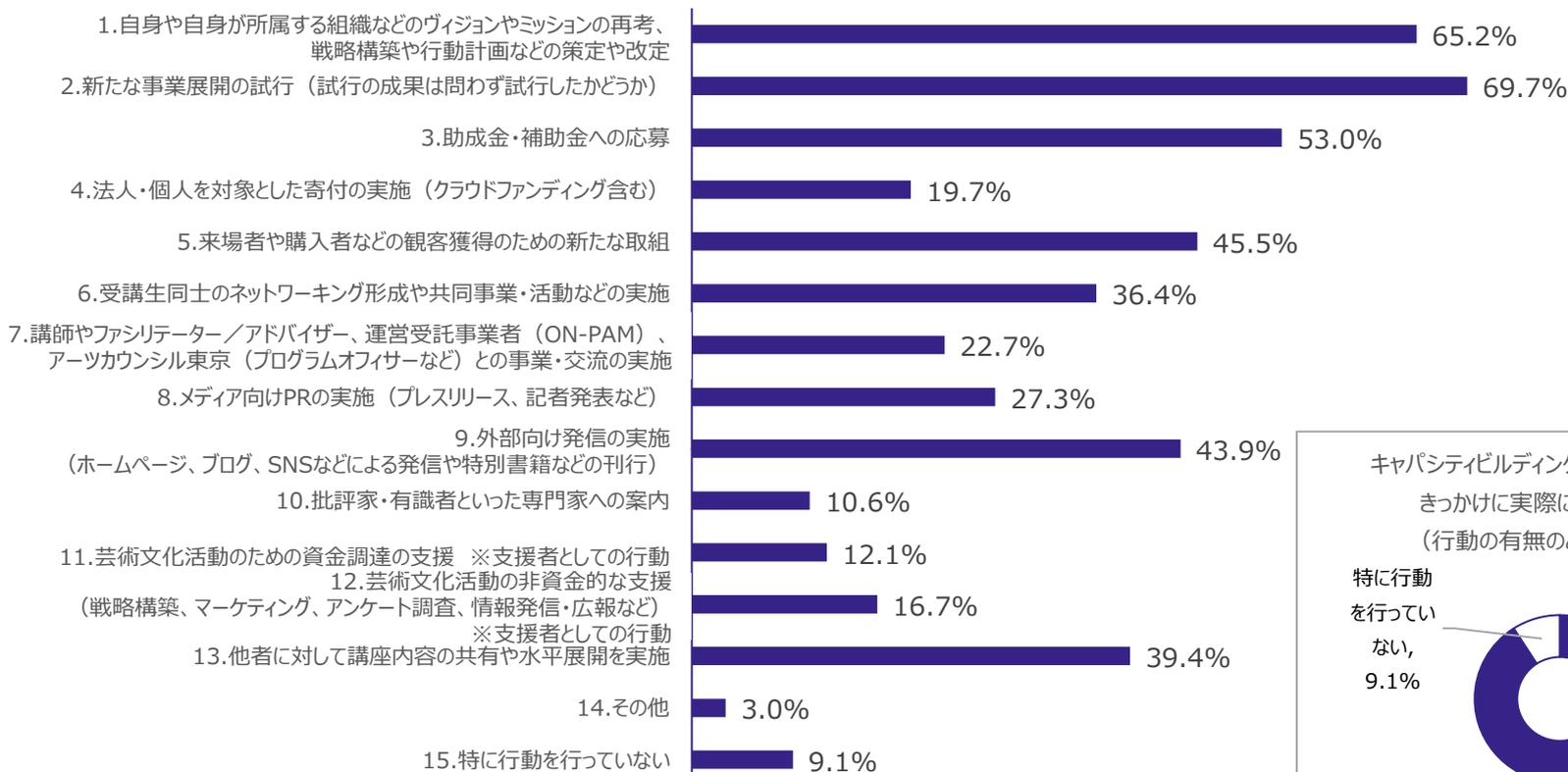
- ・レクチャーや受講生との対話から、各地の現場の課題を知り、文化芸術の創造環境の向上に取り組みたいと考えるようになった。講座を通じて立案した「ART JOB FAIR」を立ち上げるにあたっては、創造環境の向上や人材支援などの分野はこれまで縁がなく、講座を通じて得た知識や知見がとても参考になった。



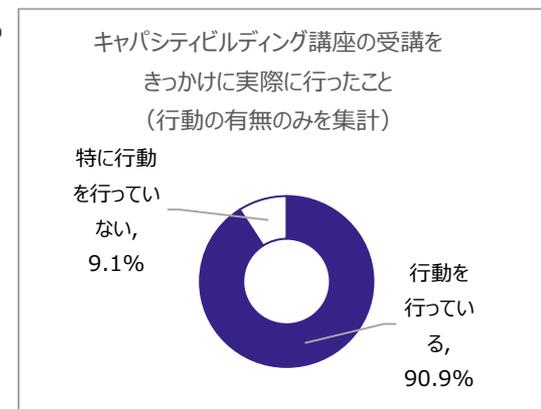
6. 受講をきっかけとした行動の有無、実行した行動

〈複数回答〉

- ・講座受講後、約9割の修了生が、講座をきっかけとした行動をとっており、約7割の修了生が「新たな事業展開の試行」や「ビジョンやミッションの再考」「助成金・補助金への応募や寄付を募る取組」等を実践している。



※その他はアートプロジェクトの評価事業等

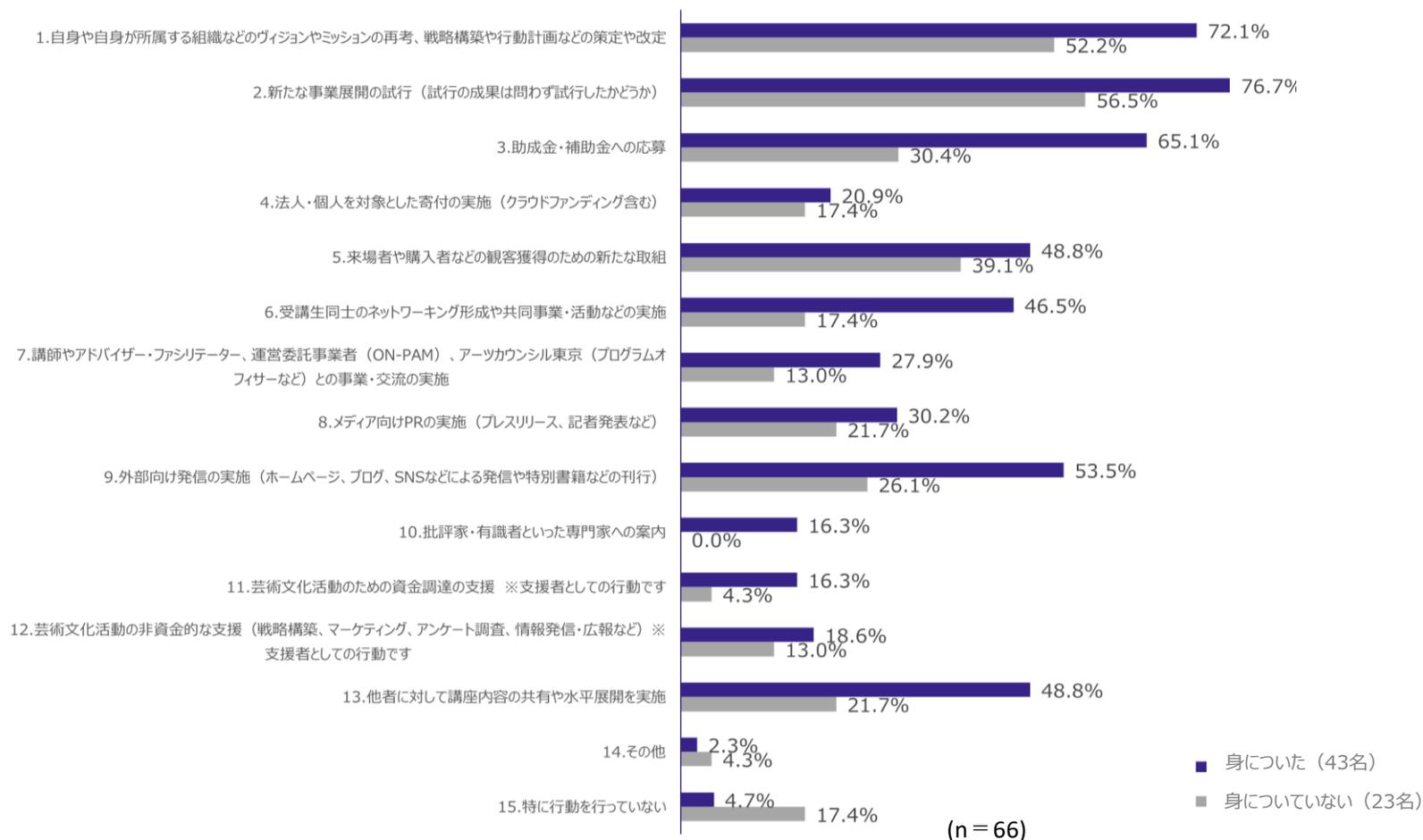


(n = 66)

7. 実行した行動～多様な学びによる価値観の変容の影響 〈複数回答〉

- ・多様な学びによる価値観が変容をした人は新たな実践や挑戦に取り組んだ傾向にある。

※ 「4. 修了生の知識・技術の習熟度合」の選択肢「7.多様な視点や価値観の学びから自らの業務に対する思考や態度の醸成」が身についた人／身につけていない人の結果を「6. 受講をきっかけとした行動の有無、実行した行動」の回答とクロス集計



8. 受講をきっかけとした行動の具体例

助成金や補助金への応募・寄付の実施など

- ・助成制度の趣旨を理解し、自分の活動目的を的確に記述し、助成申請した。
- ・ビジョン・ミッションを整理し、受講中にクラウドファンディングに初挑戦した。
- ・資金調達について話す会を始めた。

団体設立・転職

- ・受講生やファシリテーター／アドバイザーの協力や助言を得て、新たな法人を設立した。
- ・ミッションと事業モデルを明確化でき、中間支援団体を設立した。
- ・新たなチャレンジとして転職をした。

修了生同士の連携・協働

- ・同期の修了生と協働プロジェクトを実施した。
- ・同期の修了生の事業に出展した。
- ・同期の修了生が設立した団体のバックオフィスをサポートしている。

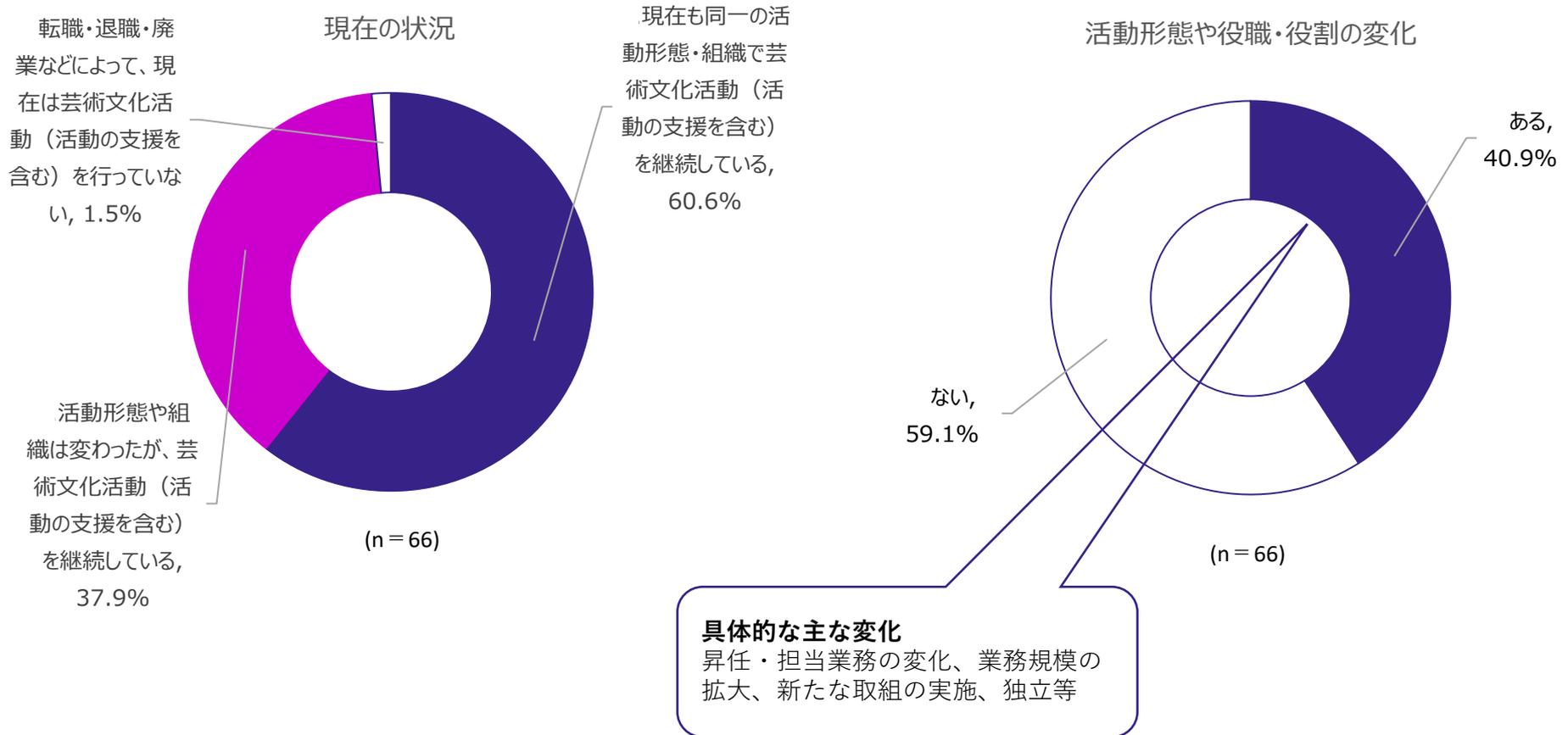
新規事業や制度の開発・講座内容の共有

- ・日本初の文化芸術界に特化した仕事探しやキャリア形成を支援する新規事業を立ち上げ、アート業界の人的基盤の強化に繋がることを実感した。
- ・ロジックモデルを介したチームビルディングワークショップを福祉施設スタッフと一緒に実施した。
- ・アウトリーチにおけるコーディネーター制度を導入した。2021年度の下半期に3名の試行からスタートし、2023年度現在9名で継続している。
- ・担当事業でスポンサー制度を立ち上げ、運用を開始した。
- ・同世代のダンス関係者と、互助・学び合いのためのチームを結成し、複数のイベントを実施、講座の学びも共有した。



9. 修了生の受講時からの変化

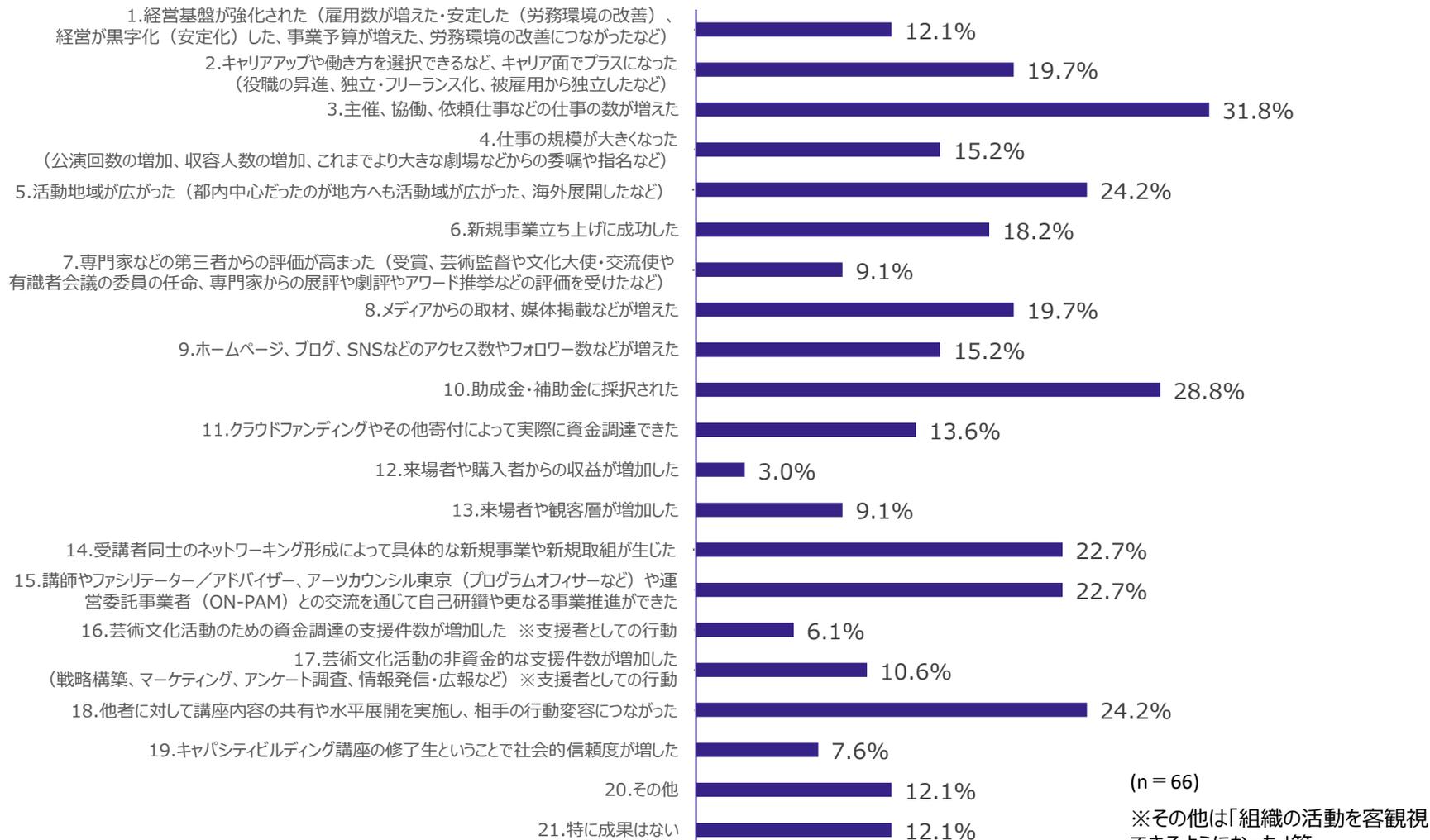
- ・ 98%の修了生が芸術文化活動を継続している。
- ・ 4割の修了生が受講時の活動形態や役職・役割に変化があり、それらには活動の広がりがある。



10. 受講後の行動をふまえた成果

〈複数回答〉

・仕事数の増加、助成金・補助金の採択といった活動基盤の多面的な増強に加え、他者に対して講座内容の共有や水平展開により、相手の行動変容につながったという良い影響も生まれた。



1 1. 受講後の行動をふまえた具体的な成果の事例

活動の基盤強化・広がり

- ・助成金や行政の委託事業に採択されるようになり、活動規模が広がった。
- ・これまで赤字だった業務にプラス予算が付いた。
- ・運営メンバーの人数、売上、利益、取引先数が全て増加した。
- ・時給単価が上がり、「専門性がある」と自信を持って言えるようになった。
- ・国内上映や海外の国際映画祭参加が増えた。

広報・外部評価等

- ・地元メディア、新聞社、ラジオへの出演依頼、ウェブメディアへの取材掲載などが増えた。
- ・自作への劇評や国内演劇賞の推薦が増えた。
- ・海外映画祭への出品・上映が増えた。
- ・カンパニーのSNSフォロワーが3倍に増えた。

資金調達・来場者等

- ・助成金やクラウドファンディングでの資金調達が成功した。
- ・公的・民間助成金の獲得が増えた。
- ・公立劇場からの委託公演が増えた。
- ・SNSでの評判や口コミによる来場者が増加した。
- ・公演数を増やしても満席になるようになった。

最終レポートの内容の実現

- ・舞台芸術公演のアクセシビリティを高める活動を継続している（日本語バリアフリー字幕、アクセシビリティコーディネーターなど）。
- ・演劇と子育ての共存のための施策として、稽古時間の改善、創作関係者の子供の保育、公演時の託児（無料）サービスなどを実施している。
- ・舞台芸術業界の労働環境について、芸術系大学で講師を務めるほか、各種ワークショップ、講義などでも展開している。
- ・新たな対象層へアプローチする音楽ワークショップを実施できた。
- ・ダンスのコミュニティを継続させ、2年連続で助成金に採択されたこともあり充実したプログラムを実施できた。
- ・芸術文化領域におけるバックオフィスのあり方に関する対話企画を多ジャンルの関係者と協働し、報告書を公開した。



1 2. 行動の変化から具体的な成果までの事例

細川洋平 平成31年度修了
劇作家・演出家・演劇カンパニーほろびて主宰



行動の変化

- 講座がきっかけで、芸術関係者とモヤモヤを語り合う「いきつく／ikituk」という居場所づくりをはじめた。
- 創造的な思いを持った多様な受講生と出会い、多角的な視野の獲得につながった。以前は自分に関係ないと思っていた助成金についても、助成金プログラムの意図を理解して申請書を書けるようになり、助成金の獲得につながった。
- 受講前は、批評家に見てもらえる機会を作れていなかった。講座を受講し、多様な価値観に触れて「みんな、同じ人間なんだ」と感じた。批評家に対する印象も同様で、心理的に案内をしやすくなった。実際に公演案内を実践したところ、批評家の観劇や劇評の掲載等、さまざまな評価につながった。

成果の発現

- 受講直後の公演から批評家や演劇ジャーナリストの注目を集め、SNSフォロワーが増加し、SNSでの評判や口コミにより来場者増加
- 2021年、『心白』が第11回せんがわ劇場演劇コンクール グランプリ、劇作家賞、俳優賞の三冠を受賞
- 2021年、故・蜷川幸雄氏立ち上げの「さいたまネクスト・シアター」最終公演『雨花のけもの』（演出：岩松了）脚本担当
- 国際交流基金Performing Arts Network Japan「今月の戯曲」選出。読売、朝日、毎日新聞等主要紙の劇評掲載が急増（3年間で計10本）。
- 2023年、『あでな／／いある』（助成 アーツカウンシル東京）は新聞三紙にて評される。演劇批評誌「テアトロ」「悲劇喜劇」等での評価や、第30回読売演劇大賞（2020年）中間選考にて作品『苗をうえる』が推挙される。芸劇eyes2023ラインナップ劇団に選出、これまで以上に大きな劇場での新作上演。セゾン文化財団（セゾン・フェローⅡ）に選出。

1 2. 行動の変化から具体的な成果までの事例

大原とき緒 令和2年度修了
映画作家、プロデューサー、NPO法人独立映画鍋理事



行動の変化

- 受講して驚いたのは、色んな分野の人が参加しており、それぞれの分野の言語があり、知らない言葉が飛び交っていたこと。映画の活動以外の言語があるということを知ることが楽しく、大きな学びになった。
- 他の受講生から、口下手なことに対して他の受講生から肯定的なフィードバックを受けて、それが自信になり、活動の指針にもなっている。
- 短編映画「Bird Woman」の製作のためのクラウドファンディングを行った。講座で学んだ、借り物でない自分の言葉や、多くの人を説得しやすくするために大事な数字の学びを活かし、クラウドファンディングのページを作成、目標額調達が成功した。助成金の申請書も、的確に書けるようになった。ファンドレイジングの観点から任意団体を設立した。
- 講座受講前は新聞に載るのが怖いと思っていたが、受講をきっかけにメディアに出ることによって、活動がより色々な人に認知されるようになった。
- NPO法人では会員から理事に就任し、意思決定の場に女性が増えることの大切さを実感した。

成果の発現

- 監督作品「Bird Woman」製作のためのクラウドファンディングの成功・文化庁助成金採択、プチョン国際ファンタスティック映画祭（2022年7月）インターナショナルコンペティション部門選出、その他4つの海外の国際映画祭での上映企画を獲得
- プロデュースした長編オムニバス映画を製作し、2023年に東京、大阪、神戸、名古屋で劇場公開
- 朝日新聞「ひと」欄掲載やラジオ出演、日本とミャンマーを舞台にした新作長編映画のプロジェクトをスタートさせる等、活動が広がっている。

1 2. 行動の変化から具体的な成果までの事例

高山健太郎 令和3年度修了
ART JOB FAIR代表、株式会社artness代表



行動の変化

- 創造活動をいかに続けていくのかという自分が抱えている課題は、文化芸術界全体が抱える課題でもあると認識した。業界にはアートジョブやジョブフェアという概念がなく、文化芸術の担い手の就労支援という機会が殆どなかった。「ART JOB FAIR」を始めようと思ったのは、受講を通じて、様々な芸術団体が人材確保に苦労している一方で、個人は希望する仕事に出会いづらく主体的なキャリア形成が難しい事態が生じているなど、色々な意見を聞き、芸術文化の活動基盤を強化する必要があると感じたから。受講によって、一人の課題はみんなの課題と気づき、働きがいや働きやすさのある業界へのアップデートや、創造環境の向上に取り組みたいと考えるようになった。
- コロナ禍でステイホームの期間もあったが、安心して会話ができるオンライン講座だったため、交流が深まり、様々な仲間と出会えた。
- 現代アートをメインに活動していたので、その他の表現分野の人とは接点がなかった。講座を受講して、文化芸術の中にはいろんな人がいて、彼らを通じて文化芸術を支える様々な職能や構造を知れたのはよかった。

成果の発現

- 芸術文化と社会の関係を捉え直し、芸術文化領域の働き方や就労の課題を受講生仲間と共有し、日本初の文化芸術界に特化した「ART JOB FAIR」を立ち上げた。
- 講座での学びを活かし、立ち上げ期の第1回、第2回をクラウドファンディングで資金調達を行い、のべ462万円を獲得。
- 第1回は2023年1月に初開催、10団体、のべ310人参加、第2回は2024年1月に開催、16団体、のべ400人が参加した。
- メディア取材や協賛企業等が増加し、講演やトークイベント等の依頼も増え、受託中心の事業から自主事業への転換を図れた。

ヒアリング対象者

1. 大園康司	振付家・ダンサー・舞台音響家	平成30年度修了
2. 根木一子	公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー	平成31年度修了
3. 細川洋平	劇作家・演出家・演劇カンパニーほろびて主宰	平成31年度修了
4. 我妻恵美子	舞踏家、振付家、演出家、AGAXART代表	令和2年度修了
5. 石川絵理	NPO法人シアター・アクセシビリティネットワーク(TA-net)事務局長、 一般社団法人ダイアログ ジャパン ソサエティ	令和2年度修了
6. 大原とき緒	映画作家、プロデューサー、NPO法人独立映画鍋理事	令和2年度修了
7. 高山健太郎	ART JOB FAIR代表、株式会社artness代表	令和3年度修了
8. 今野誠二郎	アーティスト、6okken代表	令和4年度修了

※所属、役職はヒアリング実施時（令和6年1月～3月）のもの

■調査結果のまとめ 修了生のヒアリングから見えてきた成果（再掲）

活動基盤の強化から受講生同士の協業、新規事業立ち上げ、活動の評価の向上まで、様々な成果が生まれている

自団体の雇用の増加や法人化からアートの仕事に特化したジョブフェア「ART JOB FAIR」のような業界初新規事業の立ち上げ、批評家からの評価・受賞の増加、メディア露出の増加、依頼仕事の増加、クラウドファンディングで資金調達を行い制作した映画の上映機会や評価の増加等、様々な成果が表れている。講座を通じて獲得した知見や価値観、意識の変化によって行動の必要性を認識し、受講が実際に実践のための初めの一步を踏み出すきっかけになっている。

成果に至るまでの第一歩を講座によって踏み出せており、第一歩の行動変容が成果にとって重要である

講座を通じた受講生仲間との学び合いによって共に成長し、成長過程で行動を起こし、行動の結果として様々な成果が出ている。実際に修了生のヒアリング内容からすると、どのような行動なのかは個人によるが、行動変容があるから成果に結びついている。

自らの考えをアウトプットにしたものは重要。講座終了後の行動変容と成果につながっている

講座の中で作成した課題解決／価値創造戦略レポートが行動の礎となり、その実現をしたというケースがある。レポートが行動変容のための指針のような役割となっている。

また、講座応募時に受講動機や応募段階での自身の課題や目標、その実現のために考えうる糸口を書いてもらうことによって、受講者の考えが受講を通して深く清廉されたり柔軟に変化してゆき、レポート作成により自身の活動の価値や目標の実現のための戦略的思考をより言語化できるようになることにつながっている。

一步を踏み出すきっかけは、講座で知り合った受講生仲間やファシリテーター/アドバイザーの存在が大きい

講座の内容そのものよりも、講義をきっかけとして受講生同士やファシリテーター/アドバイザーとの対話が行動変容につながっている場合が多い。

1. 大園康司

振付家・ダンサー・舞台音響家 平成30年度修了

- ・ダンスユニットとして活動した後、現在は学校や公共ホールでのアウトリーチ、地域コミュニティの現場で創作・ワークショップを中心に活動を展開
- ・課題解決戦略レポート「これからの『コンテンポラリーダンス』に向けてーシーンを支える仕組みをアーティスト自らがつくるー」



きっかけ・問題意識

- ・アーティスト活動とは別の仕事で得た知見を、互助機能が求められているコンテンポラリーダンス・シーンにおいて活かせないかという問題意識があった。他分野の専門性を学ぶことで、自身の活動やダンス・シーン全体が抱える課題を改善する糸口が見つかり、今後の活動の方向性を定められるのではないかと考えた。

受講で得た学びと行動変容など

- ・従来から個人での活動がベースであった。対組織、対行政のミッションに基づいた仕事の目的や意識を理解していたつもりだったが、ロジックモデルの考え方を学び、組織の論理への理解を深められた。今も事あるごとに、この講座を思い出している。
- ・評価という概念に出会ったことによって、物事を多面的に捉えられるようになった。さらに、作品だけではなく、ライフスタイルという観点からも、自分の活動を客観的に捉えることができるようになった。
- ・受講後にコロナ禍になり、地域の商工会議所の方と話をする機会があった。受講前であれば相手と話をするときには作品の話だけをしていたはずだが、キャパシティビルディング講座のおかげで、外からの視点で見た時に、自分たちの活動をどう伝えれば分かってもらえるのかを念頭に置いて話せた。自分とは異なる文脈、異なる言葉を身に付けることは大事であり、この講座の持つ意味が大きいと思った。

講座受講後の主な成果

- ・コンテンポラリーダンス・シーンにおける共助的な仕組みづくりの試行や実践の機会を増やし、活躍の場を広げている。
- ・「ダンスを続ける・支えること、アーティストの保障について、みんなで考えてみる」ディスカッションイベントを開催
- ・地域創造のステージラボ（公共ホール・劇場等および地域の文化・芸術に携わる地方公共団体の職員を対象とした研修事業）のワークショッププログラムのコーディネーターとしてワークショップやトークイベントを他のアーティストと共に開催

2. 根木一子 公益財団法人新潟市芸術文化振興財団 アーツカウンシル新潟 プログラムオフィサー 平成31年度修了



- ・共同通信社の中高生取材活動の事務局に務めた後、アーツカウンシル新潟にてプログラムオフィサーとして入職し、文化芸術活動と福祉に関わる助成事業や相談対応業務、特に障害福祉に関わる事業を担当
- ・課題解決戦略レポート「インクルーシブな活動を求めている人へ、届けるために」

きっかけ・問題意識

- ・前年度にキャパシティビルディング講座を受講した職場の先輩がきっかけで受講をした。キャパシティビルディングという名のとおり、文化芸術業界で働く基本的な考え方を習得し、基礎体力を付けるという目的があった。

受講で得た学びと行動変容など

- ・講座受講によって、社会と芸術文化に対する思考のベースをつくっていただき、今も仕事をする際に役立てている。社会的包摂というテーマで戦略レポートを書いたが、ファシリテーター／アドバイザーに深掘りした論点や、より成熟した視点を教示いただけたのはうれしかった。
- ・ロジックモデルを考える作業が楽しく、新潟市の劇場のロジックモデル作成ワークショップへ参加したり、自身の組織のロジックモデルを見直したりする際に活用できた。
- ・芸術文化のジャンルや職種に対する優劣や偏見がない多様な受講生と一緒に学び合うことで、一般的な社会通念や言葉に対しても自分なりの考えを持ち、昨日までの価値観や考え方に縛られずに、変化できるようになった。

講座受講後の主な成果

- ・受講時から一貫して関心を持つソーシャルインクルージョン事業について、この5年で職務経験を積み重ねた結果、新潟市外からの依頼仕事や職務外の活動が増加するなど、活動の幅や地域が広がっている。
- ・2020～2023年 障がいのある方の表現活動調査および展覧会「あふれる思い ふれる気持ち」運営協力（新潟市主催「文化芸術による共生社会推進事業」）トーク登壇、2023年 新潟市視覚障害者福祉協会主催「視覚障害者のための美術鑑賞」運営協力
- ・2021年 THEATRE for ALL 子ども哲学対話 運営協力、2023年「アートミーティングatさいたま国際芸術祭」にて新潟市内の出展作家のコーディネート、NPO法人クリエイティブサポートレッツの「表現未満」プロジェクトへの寄稿等
- ・キャパシティビルディング講座の修了生であることが複数の地方都市で文化関係者に認知されていた。また、講座の他の修了生と業務において協力・協働関係を促進することができた。

3. 細川洋平

劇作家・演出家・演劇カンパニーほろびて主宰 平成31年度修了

- ・個人ユニット『ほろびて』を立ち上げ、同名義での企画、製作、制作、劇作、演出
- ・課題解決戦略レポート「小さなカンパニーが孤立しないことから」



きっかけ・問題意識

- ・ソロカンパニーとして活動する中で、芸術関連の情報収集、パフォーミングアーツ業界へのコンタクト、小さな団体の孤立といった課題を抱いており、それらを解決するための糸口を見つけたかった。自身の活動の課題に照らし、他の人の実践や取組等を知りたいと思い、参加した。

受講で得た学びと行動変容など

- ・講座がきっかけで、芸術関係者とモヤモヤを語り合う「いきつく/ikituk」という居場所づくりをはじめた。
- ・創造的な思いを持った多様な受講生と出会い、多角的な視野の獲得につながった。以前は自分に関係ないと思っていた助成金についても、助成金プログラムの意図を理解して申請書を書けるようになり、助成金の獲得につながった。
- ・受講前は、批評家に作品を見てもらう機会を作れていなかった。講座を受講し、多様な価値観に触れて「みんな、同じ人間なんだ」と感じた。批評家に対する印象も同様で、心理的に案内をしやすくなった。実際に公演案内を实践したところ、批評家の観劇や劇評の掲載等、さまざまな評価につながった。

講座受講後の主な成果

- ・受講直後の公演から批評家や演劇ジャーナリストの注目を集め、SNSフォロワーが増加し、SNSでの評判や口コミにより来場者増加
- ・2021年、『心白』が第11回せんがわ劇場演劇コンクール グランプリ、劇作家賞、俳優賞の三冠を受賞
- ・2021年、故・蜷川幸雄氏立ち上げの「さいたまネクスト・シアター」最終公演『雨花のけもの』（演出：岩松了）脚本担当
- ・国際交流基金Performing Arts Network Japan「今月の戯曲」選出。読売、朝日、毎日新聞等主要紙の劇評掲載が急増（3年間で計10本）。
- ・2023年、『あでな／／いある』（助成 アーツカウンシル東京）は新聞三紙にて評される。演劇批評誌「テアトロ」「悲劇喜劇」等での評価や、第30回読売演劇大賞（2020年）中間選考にて作品『苗をうる』が推挙される。芸劇eyes2023ラインナップ劇団に選出、これまで以上に大きな劇場での新作上演。セゾン文化財団（セゾン・フェローⅡ）に選出。

4. 我妻恵美子

舞踏家、振付家、演出家、AGAXART代表 令和2年度修了

- ・舞踏集団・大駱駝艦で磨赤兒氏に師事、2020年にソロアーティストとして独立しAGAXARTを設立。舞踏公演の企画運営、制作、創作、発表
- ・課題解決戦略レポート「個人がアーティストとして自覚を持ちながら踊り続けるために一大地に足がついた実践戦略ー」



きっかけ・問題意識

- ・ 2020年に独立した頃に、講座の存在を知った。活動基盤がまだ不安定な時に、活動資金を何とかしたい、活動を経済的に維持する術や、制作・マネジメントの知識を身に付けたいという意識が受講の動機であった。

受講で得た学びと行動変容など

- ・ 作品とマネジメントは別だと学び、自分の踊りが評価されないのは踊りが理由ではなく、宣伝や他者へのアプローチ方法など他の要素もあるからだと感じた。
- ・ 独立当時、来月仕事があればよいという感覚で、近視眼的であった。受講によって、長期的な考え方が身に付いたのは大きな収穫。ビジョン、ミッションを自分のウェブサイトに掲載して毎年見直し、自身の指針として活動を続けていけるようになった。
- ・ 人に自身の活動をわかりやすく説明できるようになった。自分の悩みを整理して考える癖がついた。一緒に作品を作っていく仲間と出会い、協業者とゴールに向かって行動することが可能となった。
- ・ 受講生仲間から鋭い質問や意見をもらい内省につながった。
- ・ 企画書を書き、助成金申請もチャレンジし、助成金の採択や、アートプロジェクトの実現につながった。

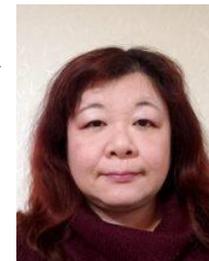
講座受講後の主な成果

- ・ 2020年、自身の舞踏カンパニー設立。以降、台北国際芸術村の滞在芸術家として選出、ソロ作品創作発表、第39回 Battery Dance Festival（ニューヨーク）よりアジア代表として招聘。
- ・ AGAXARTとして、2021年、日本舞踏と台湾演劇の国際コラボレーション「日日是好日」公演（台湾・台北、助成 アーツカウンシル東京）、北斎漫画舞踏「北斎漫画の墨の囁き、街の響き」（主催 AGAXART、「隅田川 森羅万象 墨に夢」実行委員会、共催 墨田区）に創作・発表。
- ・ 2022年東京文化会館主催公演で振付・演出・舞踏を手掛けた作品「虫めづる姫君(堤中納言物語より)」を発表。朝日新聞等に劇評掲載

5. 石川絵理 NPO法人シアター・アクセシビリティネットワーク(TA-net)事務局長、一般社団法人ダイアログ ジャパン ソサエティ 令和2年度修了

・生まれて以来、聴覚障害当事者として“音”や“声”、“言葉”の概念を探求し続けている。視覚フル活用で生き、視覚言語で思考している。2012年、同じ聴覚障害当事者の仲間と当事者を中心とした観劇サポート事業の支援に取り組むTA-netを設立。ダイアログ・イン・サイレンスのアテンドとしても活動

・課題解決戦略レポート「多言語の意味を変える政策提案型戦略」



きっかけ・問題意識

- TA-netの同僚より、情報保障付きで開催される講座だから受講したらどうかと紹介された。活動7年目でなかなか「観劇サポート」について理解が行き渡らず、さらなる啓発の手法と資金確保について学びたいと思った。
- 自分は演劇畑出身ではない（劇団や劇場に所属しているわけでもなく、役者でもなく、制作経験もなく）ので、団体で活動していくにあたり知識や経験の幅を広げたいと思った。

受講で得た学びと行動変容など

- 体系だった講座内容、アウトプットの機会である受講生同士のディスカッション、レポート提出と発表が良かった。
- レポート提出と発表により、自分の研究や考えを卒論のようにまとめる機会ができたのが良かった。大学時代、まともな情報保障は得られなかったため、自分の言葉（日本手話）で受講、発表できるというのは非常に良い経験であった。
- 当事者とは誰を指すかという問題意識において、受講をとおして誰もが当事者であり、ありとあらゆる人を巻き込める可能性に気づいた。
- 自分たちの活動を文字にまとめるのはなかなか難しいのだが、この講座を通して伝えたいことが伝わるようになったのではないかと考える。
- 同じ受講生や修了生のネットワークを通して、情報提供やクラファンへの支援を行っている。

講座受講後の主な成果

- 受託事業や大型助成等を得ることができるようになり、専任職員やアルバイトの雇用も増加した。
- 文化庁委託事業令和4、5年度障害者等による文化芸術活動推進事業「舞台手話通訳者の人材育成および実践普及、観劇サポート啓発」、「全国への舞台手話通訳派遣 公募プログラム」、「舞台手話通訳者のための集合研修」、「メゾン」ワーク・イン・プログレス等の実施
- 各種事業への応募書類も以前より書けるようになり、第10回プラチナ・ギルド アワード受賞決定など、活動が全国規模に広がった。
- 令和3年の障害者差別解消法改正という社会環境の変化もあり、観劇サポートへの意識が高まっており、相談件数が増えている。

6. 大原とき緒

映画作家、プロデューサー、NPO法人独立映画鍋理事 令和2年度修了

- ・女性の社会的な物語に寄り添い、インディペンデントの映画作家として活動中。2018年の西日本豪雨災害のための寄付シアター「Donation Theater」発起人のひとり
- ・課題解決戦略レポート「声をあげられない人たちの声をとどけるためにー治験者のエネルギー・トライアンドエラーの先に見えてくるものー」



きっかけ・問題意識

- ・ コロナ禍の影響で色々なプロジェクトがストップしており、これからどうしようと、どん底の状態であった。口下手で文章を書くのも苦手だったが、自分の映画を通じて伝えていきたい「声をあげられない人々の声になる」という想いを広げていく為に、いかに文章で自分の企画を相手に伝えていくか、自分の知名度を上げていくかを課題としていた。
- ・ 多くの師と友達と出会いたい。新しい考えを取り入れたい。新しいステージに立ちたい。これらを目標にしていた。

受講で得た学びと行動変容など

- ・ 受講して驚いたのは、色んな分野の人が参加しており、それぞれの分野の言語があり、知らない言葉が飛び交っていたこと。映画の活動以外の言語があるということを知ることが楽しく、大きな学びになった。
- ・ 他の受講生から、口下手なことに対して他の受講生から肯定的なフィードバックを受けて、それが自信になり、活動の指針にもなっている。
- ・ 短編映画「Bird Woman」の製作のためのクラウドファンディングを行った。講座で学んだ、借り物でない自分の言葉や、多くの人を説得しやすくするために大事な数字の学びを活かし、クラウドファンディングのページを作成、目標額調達が成功した。助成金の申請書も、的確に書けるようになった。ファンドレイジングの観点から任意団体を設立した。
- ・ 講座受講前は新聞に載るのが怖いと思っていたが、受講をきっかけにメディアに出ることによって、活動がより色々な人に認知されるようになった。
- ・ NPO法人では会員から理事に就任し、意思決定の場に女性が増えることの大切さを実感した。

講座受講後の主な成果

- ・ 監督作品「Bird Woman」製作のためのクラウドファンディングの成功・文化庁助成金採択、プチョン国際ファンタスティック映画祭（2022年7月）インターナショナルコンペティション部門選出、その他4つの海外の国際映画祭での上映企画を獲得
- ・ プロデュースした長編オムニバス映画を製作し、2023年に東京、大阪、神戸、名古屋で劇場公開
- ・ 朝日新聞「ひと」欄掲載やラジオ出演、日本とミャンマーを舞台にした新作長編映画のプロジェクトをスタートさせる等、活動が広がっている。

7. 高山健太郎

ART JOB FAIR代表、株式会社artness代表 令和3年度修了

- ・瀬戸内国際芸術祭や金沢での工芸に特化したアートフェア等の運営やキュレーションに関わり、2021年に独立
- ・課題解決戦略レポート「日本唯一のアートの仕事に特化した就職フェア『ART JOB FAIR』－文化芸術活動の創造環境を支える雇用・人材育成の課題解決を図る－」



きっかけ・問題意識

- ・独立を決意してからコロナ禍が起こり、受託事業中心のビジネスモデルでは成り立たなくなり、大きな事業転換をしないといけないと悩んでいた。芸術文化と社会の関係を捉え直したいという思いで講座を受講した。

受講で得た学びと行動変容など

- ・創造活動をいかに続けていくのかという自分が抱えている課題は、文化芸術界全体が抱える課題でもあると認識した。業界にはアートジョブやジョブフェアという概念がなく、文化芸術の担い手の就労支援という機会が殆どなかった。「ART JOB FAIR」を始めようと思ったのは、受講を通じて、様々な芸術団体が人材確保に苦労している一方で、個人は希望する仕事に出会いづらく主体的なキャリア形成が難しい事態が生じているなど、色々な意見を聞き、芸術文化の活動基盤を強化する必要があると感じたから。受講によって、一人の課題はみんなの課題と気づき、働きがいや働きやすさのある業界へのアップデートや、創造環境の向上に取り組みたいと考えるようになった。
- ・コロナ禍でステイホームの期間もあったが、安心して会話ができるオンライン講座だったため、交流が深まり、様々な仲間と出会えた。
- ・現代アートをメインに活動していたので、その他の表現分野の人とは接点がなかった。講座を受講して、文化芸術の中にはいろんな人がいて、彼らを通じて文化芸術を支える様々な職能や構造を知れたのはよかった。

講座受講後の主な成果

- ・芸術文化と社会の関係を捉え直し、芸術文化領域の働き方や就労の課題を受講生仲間と共有し、日本初の文化芸術界に特化した「ART JOB FAIR」を立ち上げた。
- ・講座での学びを活かし、立ち上げ期の第1回、第2回をクラウドファンディングで資金調達を行い、のべ462万円を獲得
- ・第1回は2023年1月に初開催、10団体、のべ310人参加、第2回は2024年1月に開催、16団体、のべ400人が参加した。
- ・メディア取材や協賛企業等が増加し、講演やトークイベント等の依頼も増え、受託中心の事業から自主事業への転換を図れた。

8. 今野誠二郎 アーティスト、6okken代表 令和4年度修了

- ・山梨県河口湖町でアーティスト・ラン・レジデンス「6okken」を設立。アーティストとして筒（tsu-tsu）名義で、実在の人物を取材し、演じる「ドキュメンタリーアクティング」の実践を継続展開。
- ・課題解決／価値創造戦略レポート「『ひとつの場所・集まりをつくることだけでは充分でない』アーティスト・ラン・レジデンス『6okken』について」



きっかけ・問題意識

- ・アーティスト自治のレジデンス・コミュニティ運営という、ベンチマークや方法論が蓄積されていない活動を実行するにあたり、役立つ知識や方法論を会得したかった。そんな中でキャパシティビルディング講座を知り、作品制作、活動資金の獲得、運営メンバーの関係構築等の地力を上げるために受講した。

受講で得た学びと行動変容など

- ・内容に加え、講座を受講することを通じて、他の修了生等とのネットワークを得られた。
- ・講座を通して、芸術文化分野の課題（優秀な人がこれだけ頑張っているのに業界がなかなか改善されないという状況）を再認識できた。その答えを誰かが示してくれることに期待するのではなく、各々の現場で各々の活動を公開、共有するのが重要だと認識し、実行に移せた。
- ・何かをやるには複数の関係者が必要。業界を超えて、総合戦で課題に立ち向かうべきということがわかった。
- ・会計の会社を経営している受講生と講座で知り合い、サポートしてもらっている。
- ・講座の内容は、機能面ではなく方法論を身に付けるという点で有用であり、講座終了後に自分の仲間たちにも講座の内容のようなものをシェアしている。方法論を共有する講義が増えると、各アート団体が主体性を持ち、他者と共同するという流れが出てくると思う。

講座受講後の主な成果

- ・6okkenウェブサイトやSNSなどのアクセス数・フォロワー数の増加
- ・6okken入居者増、運営の改善、講座受講仲間との協業、2024年3月に山梨県の補助金を得て最大規模のイベントを開催
- ・個人でも、公立美術館の初のソロ企画展の開催（十和田市現代美術館）、第28回学生CGコンテストアート部門最優秀賞受賞、やまなしメディア芸術アワード2023-24入選、2023年FUJI TEXTILE WEEK パフォーマンス作品発表等、作品発表の場や評価の向上
- ・2023年Forbes Japan 世界を変える30歳未満30人選出他、各種メディアインタビュー等増加